

いう一大繊維都市の中に屋敷があり、織機を備える土地も十分あったので、織物業を始めるには最適な好条件であった。当世人にも勧められたりして、一時は真剣に転職も考えたのだが、最終的には教育こそが自分の天職であり、また、私に与えられた責務であると心に銘じ、やめたのである。それ以後はただ一筋、職務に専念してきたと信じている。

振り返れば教頭職十四年、校長職七年、教職にあること通算四十二年の足跡を刻むことができ、いささかなりともその責務を全うし得たのではないかと思っている。

いまこうして傘寿を迎え、静かに歩みきた道をたどりながら、私の人生航路はいろいろと紆余曲折はあったが、なすべきことはなし得たとの思いでいられる感謝の毎日である。

引揚げ少年の記

大阪府 玉木正豊

なるべくなら朝鮮時代のことは忘れよう、引揚げの苦労話も避けよう、というのが私のこれまでの気持ちでした。とかく折あるごとに自分たちの「昔の栄華」を語りたがる今はじき両親に対して、戦後の流行歌ではありませんが、「今さら、何を言ってるのさ」と、反発していた少年時代の気持ちの尾を引いているのでしょう。過去よりは未来を話したかったです。

ただ、戦後すでに五十二年、当時の小学生も、今は仕事の第一線からリタイアする年代になりました。記録を残すことの意味も少しは分かる年齢です。そんな心境の変化に自分でもやや驚きながら、引揚げ少年の記憶を、こうして綴ってみました。

記憶していることだけを、自分の気持ちに忠実に書いたつもりですが、しよせん、子供の記憶は、子供の

記憶です。公刊資料を参照したわけでもないですし、厳密な意味で記録といえるかどうか、疑問だと自分でも思います。

朝鮮晴れ 敗戦の日

敗戦の日は、南朝鮮中央部に位置する忠清南道の清州で迎えました。道庁のあった街です。私は、当時満年齢で九歳のおよそ日本が戦争に負けるなど思いもしなかった軍国少年でしたが、半面、まだ小学校（当時は国民学校といいました）の四年生ですから、無邪気なものでありました。職員室で正午からのラジオ放送を聞いた先生方の中には、涙を流している方もいましたが、私たちは、即時下校となったことの方を喜んだような記憶があります。

昭和二十年にもなると、戦闘機の燃料に利用するのだからと、小学生も授業はそちのけで、松根掘りに明け暮れる毎日でした。夏休みもずいぶん短縮されていますが、八月十五日は特別に登校を指示されたようには覚えていませんので、もともと登校日だったのかもかもしれません。

その日は、清州も、雲一つない晴れ上がった日でしたが、少年たちは「今日は日本晴れだな。でも、これからは朝鮮晴れと言うのかな」などと、下校の隊列を組みながら冗談を言い合ったものです。本能的に自分たちが主権者でなくなったことを悟り、その不安を紛らせようとしていたのかもしれない。

帰路途中で一群の朝鮮人たちに会いました。今になって考えれば独立回復の祝賀デモだったのですが、「マンサー（万歳）、マンサー」の歓呼とともに、早くもあの巴のデザインの国旗が打ち振られていました。「用意のいいことだ。これだから朝鮮人は信用できない」というのが、植民地育ちの少年のとっさの感想でした。

清州というのは、元来、文教を尊ぶ土地柄だったようで、ことに「日韓併合」の際には、官途を辞して郷里に帰り、隠遁生活に入った儒者やヤンパン（両班＝郷紳階層）が多かった地区だと聞きます。静かな抵抗の意思表示だったのでしょうか。世界史の流れを知り、立場を変えて考えれば、彼らの独立回復の喜びがいかに

ばかりであったか理解できません。

朝鮮民族は感情が清く澄み、かつ激しく動く民族です。それを思えば、むしろ、このデモが暴動化せず、通りかかった日本人の小学生たちに物理的な危険を何も感じさせなかったのは立派なことでした。独立運動のしっかりした指導者が、この地にいたことを想像させます。

ともあれ、無事に家に帰りましたが、当時父は四十歳を越えた老兵として最後の召集に引掛かって不在母と姉（国民学校六年生）が、私の顔を見て泣きだしました。私も急に悲しくなって、涙を流した記憶があります。

生まれ育った木浦

私生まれ育ったのは、もともとは全羅南道の木浦です。朝鮮の西南端にあります。湖南平野を後背地に持つ商品の集散地であり、かつ多島海に面して交易港としても発達した街だったようです。「日韓併合」後、日本人の移住もずいぶん早い時期から進んだようですが、商業・港運都市の性格を映して、市民の間にも開

明的な雰囲気があったそうです。

私たちが通った山手国民学校は、朝鮮でも名の通った名門校の一つだったように思います。この校歌は「東天ほのかに明けいけば、雲につらなる多島海。絶佳の景を庭として、立つは我らが山手校」という一番が始まるのですが、還暦を過ぎた今でも、これを歌うことができるのは自分でも不思議です。引き揚げてからは転校が多かったせいもありますが、小学校はもとより中学・高校の校歌も全く覚えていません。

木浦は商業都市ですから、上級学校としては商業学校だけでした。ここから京城高商へ進むのが一つのコースだったようです。中学校は光州にありました。あの金大中氏は、木浦商業の出身ですが、そういえば「戦時中、朝鮮人でもすごい秀才が商業にいるという噂を聞いたことがある」と、後年母が話していました。女学校もあって、母の同級生には、奈良女高師に合格した才媛もいたそうです。また後年、「韓国孤児の母」として尊敬され、日韓合作で、『愛の黙示録』という世評の高い伝記映画もできた田内千鶴子さん（故人）

は、母の同級生だったと聞いています。

私が生まれたのは昭和十年で、ずっと木浦で育ちました。姉は昭和九年の早生まれです。今の感覚でいえば、二人とも日系朝鮮人というのが正確です。父は違いますが、母は朝鮮生まれで、母系でいえば、私たち姉弟は「三世」になります。といっても朝鮮語も知らず、朝鮮人の友達もなく、学校では「朝鮮人みたいな歩き方をするな」などという叱られ方をして育った「三世」ですから、今となっては歴史の喜劇です。ただし悲しむべき喜劇です。自分たちがピエロだったのですから。

そんな私たち一家が清州に居を移したのは、昭和二十年も五月になってからのことです。父の転勤に伴うものでした。三カ月後には敗戦です。引揚げにあたっては、港町の木浦の方がずっと有利だったでしょうに、わざわざ内陸部の清州への転勤話に応じたのは、「湾岸部では艦砲射撃の危険があるが、その点、清州なら安全だ」という判断もあったからだと言は話していました。ばかばかしいような庶民の情勢分析でした。

でも一番の貧乏くじは父自身で、清州に移ったばかりに敗戦直前の根こそぎ動員にかかり、他人様に比べれば短期間だったとはいえ、苦しい二等兵生活を送りました。

敗戦による引揚げで、それまでの蓄積の一切を失った両親を、最近、つくづく気の毒に思っています。

オモニの思い出

父は綿業会社に勤めるただのサラリーマンでしたが、日本人ですから、社内のランクは相対的には高い方だったでしょう。ちょっととしたインテリで、かつ大正デモクラシーを通過した世代ですから、個人としては進歩的なポーズの身についてた人でした。若いころオンモン（朝鮮文字）を独学したり、朝鮮人の友人を持ったり、まあ風変わりな日本人に属する部類だったのでしょう。母は優しい人柄で、家の手伝いにきていた「オモニ」などとは、姉妹のような気持ちの通じ方があったようです。「オモニ」というのは、本来「お母さん」の意味ですが、日本人社会では、既婚の現地人メイドのことをいいました。植民地では安い人件費ですみますか

ら、我が家などでも来てもらえたのでしよう。

この「オモニ」のおばさんが親切な人で、私が低学年のころ、登下校中に犬にかまれたり、腕白小僧にじめられでもしたらと、学校まで送ってくる。私はそれが嫌で、幼心に「朝鮮人と間違えられる」などと思っていました。思い上がった話です。

私も一家が清州に転勤になると聞いて、その時はもう田舎に帰って孫の世話をしていた「オモニ」が、わざわざ木浦まで出てきてくれました。母と手を取り合って、泣きの涙で別れを惜しんでいたことを思い出します。

集団引揚げを待つ

父が入営したのは京城の龍山師団でしたから、幸い復員は早かった方です。九月早々には帰ってきていました。そうすると、朝鮮の人が訪ねてきます。「いまさら日本に引き揚げてどうするんです。一緒に私の田舎に行きましょう。隠し通してみせますよ」といった話を熱心にしてくださる方もありました。

でも現実はいきません。「石をもて追われる

ごとく」日本人は引き揚げていくしかありません。当然のことでしょう。近所からも一軒、二軒と、トラックを仕立てて独力で引き揚げていく人たちが出てきました。しかし我が家は、もともと清州には転居してきただばかりですし、そんなルートがありません。

汽車の切符が自由に手に入るわけはありませんし、第一、日本人が勝手に移動することは禁止されていたでしょう。心細いことながら、集団引揚げの便を待つほかありません。軍隊やお役人が、偉い順にいつの間にかいなくなつたのは、どこでも同じです。

引揚げまでの生活

朝鮮の秋の空は突き抜けるように青いといえます。清州にも米軍が進駐してきました。駅に見にいきましたが、肅然としたもので、朝鮮人の間からも歓声が上がったりはしませんでした。せっかくの独立の喜びも、勝手に南北に分断され、それぞれに占領軍が来るのですから、彼らとしては複雑な感情だったと思います。

その後、一回でしたが、朝鮮人が日本人の住宅に押し入る騒ぎがあったとかで、近所の人たちが、我が家

に夜間避難してきたことがあります。翌朝、皆で食事をしているとき、裏の朝鮮の家のおばあさんが、大根のキムチを差し入れにきてくれました。優しい隣人でした。それにしても、あのキムチの美味しかったこと、今でも忘れません。

騒動はそれ限りで、大体は治安も維持され、子供が不安がるようなことは起こりませんでした。それに敗戦後、あまり登校しなくてもよかったのか、二学期の記憶がありません。敗戦後の学校では、先生の指示で「今度は負けたが復讐戦をやる。どうしたらアメリカに勝てるか、考えをまとめよ」という授業があったのを覚えている程度です。

それより、学校に行かなくてもいいので、近所の同級生がよく遊びに来たりしていました。私は当時、まだ自転車にうまく乗れなかったのですが、この間に、級友たちの指導で乗れるようになりました。

子供たちの論争

そんなある日の子供たちの論争です。さすがに子供同士でも、そのころの話題は、「日本のどこに引き揚

げるのか」とか、「日本に帰って何になりたいか」などでしたが、一躍大問題になったのが「内地にいる食は日本人か」という同級生が出した設問でした。当人の答えは「そんなはずはない。乞食をするのは朝鮮人だ」というもので、これが多数意見ではありませんが、疑問説もあって子供同士の議論では決着がつかず、とうとう私の母が話をして、子供たちが不承不承、納得させられた形になりました。

私がこんな記憶をたどろうとする気持ちになったのは、植民地育ちの少年たちの意識構造がどんなものであったか、朝鮮の人に対する無意識の差別がどんな形で発生したかを庶民ベースの記録として残してみたいからです。「悪意がない」ことは、差別の言い訳にはなりません。

我が家の川向こうに、朝鮮人の児童だけが通う「普通学校」がありました。ごくまれに日本人の「国民学校」に入ってくる朝鮮人の子供がいましたが、これは例外です。戦後の日本で、特殊な立場にある子弟がアメリカン・スクールに通ったようなものだったでしょ

う。

「普通学校」といえば、この学校の体操の時間、それまで運動場から聞こえていた「イチ、ニツ、サン」が、八月十六日から「ハナ、ツ、セイ」に変わったのも鮮やかな記憶としてあります。「ハナ、ツ、セイ」は朝鮮語の「一、二、三」です。

アメリカ兵との交流

街を占領軍のアメリカ兵がりんごをかじりながら歩いていました。母は、「行儀が悪い」と言って軽蔑していました。我が家が安全だったのは、実は工場の空き地スペースが米軍のモータープールになり、米兵が一分隊ほど駐屯していたからです。兵士たちは若く、一様に子供っぽく、でも礼儀正しく親切で、沖繩戦を経由してきたとのことでしたが、まったく敵愾心^{てまがしん}を見せず、子供たちを可愛がってくれたのは不思議なほどでした。「アメリカ人の原像」として、今でも好感を持っています。内地と違って朝鮮では、当ても物資は豊富でしたから、「ギブミーキャンデー」などと言ったりしませんでしたが、それでもよくチョコレートな

どはもらいました。

ある日、管理室に遊びに行くと、アメリカ兵たちが皆でカンパでもしたのでしょうか、大きな紙袋いっぱいキャンデーをくれました。姉と二人、大喜びで家に帰ったのですが、明治生まれの父が怒りました。「戦争には負けたが、子供に菓子を恵んでもらうほど日本人はおちぶれていない」というわけです。辞書を

めくり、「昨日の敵は今日の友とはいえど云々」と、長文の手紙を書き、返してこいと言いました。アメリカ兵も、好意でしたことだったのでしょくに、悪いことをしました。しばらく変な顔をしていましたが、文意は分かったとみえて、やがて笑って了解してくれました。

いま思えばいかにも古風な父と話すとき、つかえつかえの父の英語に、米兵のほうがいちいち「イエス、サー」と、「サー」付きで答えていたのは、そんな父の雰囲気に関係していたのかもしれない。でも引き揚げてからの生活は惨めでした。学校では米国支給の脱脂粉乳が給食に出ました。父の時代錯誤を子供心に

滑稽に思ったものです。

引揚げは貨物列車で

いよいよ引揚げの日がきました。十月末になりました。清州は内陸部のため、朝晩の寒気はすでに相当のものでした。午前五時ごろ、まだあたりが真っ暗な中、朝鮮人の目を避けての出発ということでした。でも朝鮮の人も気付かなかったはずがありません。なにしろ、私の父など前夜、下僚だった朝鮮の人に送別会に招待され、マツカリ（朝鮮の濁り酒）を飲み歩いて、なかなか帰ってこなかったほどですから。

持ち帰る荷物はもちろん制限されていました。柳やなぎ行李こぶりが一家族で二つか三つだったと思います。あとはリュックサックです。姉と二人、子供なりに懸命な気持ちでおり、また緊張しました。「まだ見ぬ内地へ」と勇み立つものもありました。植民地の学校では「内地」がどんなに美化されて教えられていたことでしょう。その分、帰ってから失望することが多かったのです。すが……。

行動班が組織され、指示に従って乗車しました。客

車ではなく、貨車でした。それでも有蓋車でしたから、引揚列車としては恵まれていたのです。行李の上に、家族ごとに座り込んで出発を待ちます。電灯もなく、暗い車内。鉄の格子が入った小さな窓がひとつきりでした。

清州を出た列車はひとまず烏致院へと向かいました。ここで京城と釜山を結ぶ本線につながるわけです。烏致院に着くころ夜が明けてきました。天候は良かったのですが、あたりには朝もやが薄くかかっていたように記憶しています。列車がトイレ休憩のため止まりました。貨車ですから、トイレも無いのです。ここで事件が発生しました。

引揚者は老いも若きも、思い思いに貨車から飛び降りて、用を足しに行きます。外に出てから、私は父とはぐれてしまいました。それでも、貨車からかなり離れた場所まで人群れについて行って、用を足している最中、突然、列車が動きだすではありませんか。これには青くなりました。「ああ、僕はこれで内地に帰れなくなる！」。

瞬間、必死になって駆け出しましたが、周りに大人もたくさんいます。これだけの多人数を置き去りにほしないでしょ。幸いなことに、そのなかに学校の担任だった橋本先生もいらっしやいました。「おお、君も今日の汽車だったか……」というので一安心。汽車もほどなく止まるのが見えて、乗り遅れた人たちを待っていました。汽車が動きだしたとき、姉が私の名を叫びながら飛び降りようとしたといいます。

戦後ずいぶんたち、こちらがもう中年の男になってからですが、いわゆる「中国残留孤児」の方たちがテレビで親御さんに呼びかける情景を見るたび、抑えても抑えても涙が止まりませんでした。一歩間違えば、自分もああいう立場になっていたと本当に思うからです。

あっけない没収劇

やがて汽車は動きだしましたが、また止まります。今度は世話役の人が回ってきて、各家族から幾ばくかのお金を集めています。運転士から要求があったのでしょ。そんなことが何回か繰り返されました。この

ことについて、格別の感想を書こうとは思いません。格別の経験とは思わないからです。

走っては止まり、止まっては走りして、大人たちはイライラしていました。「足元を見られる」という実感があったのでしょうか。それでも、別に生命の危険にさらされるようなことはなかったのですから、基本的には感謝すべきです。列車は夕刻までに釜山駅の構内に到着しました。

このへんから、さすがに「難民」は「難民」の扱いを受けるようになりました。まず、「荷物を置いたまま、日本人は貨車から降りよ」との指示がありました。柳行李の携行は、個数制限の条件付きながら公式に認められていたはずですが、そんな抗議をしても愚痴になるだけです。行李を開け、急いで荷物を取り出そうにも、小学生の子供二人を抱えていては、両親の動きもままなりません。母が自分の両親の位牌とアルバムなどを、何とか引っ張り出したくらいでした。

子供たちも重いリュックサックを背負い、さらに両親は両手にトランクという典型的な引揚者スタイルで

下車しました。列車は荷物を積んだまま、あつという間にどこかへ行つてしまいました。絞りに絞つて行李に入れていた大事な荷物は、どうなったのでしょうか。あっけない没収劇でした。

吹きさらしの岸壁で

夕闇が迫ってきました。空腹にもなりません。今夜はどうするのか、はつきりした説明もなかったようです。線路のあたりに一群の日本人は放置されたようになりました。考えてみれば親というのは大変です。子供にご飯を食べさせなければなりません。

どこで見つけてきたのか、父が一抱えの竹を持ってきました。母は水道のある場所を探して、米を研いできました。線路のポイントを利用しての飯盒炊飯です。子供は何でも新しい体験が好きですからニコニコしていましたが、両親の気持ちは暗然としたものだったでしょう。

陽が落ちて真っ暗になりました。突然、凄まじい音が響きました。あたりが揺れた感じでした。何かが光つたような記憶もあります。サイレンが鳴り響き、米軍

のジープが走り回っているようです。駆逐艦が何かで爆発事故があったのだという噂が流れたようでした。

もとより難民にはそんな説明があるはずもなく、結局、訳が分からないまま何時間かたって、暗い中で移動の指示が出ました。連れていかれたのは釜山港の埠頭でした。建物などありません。海上に突出した棧橋で、寒風の吹きさらしている場所です。乗船がいつになるかも分かりません。細い柱を立てて電線をめぐらし、所々に裸電球がぶら下げられていました。寝るほかありません。傘を広げて風を防ぎ、トランクの上身を横たえました。小柄な小学生だったわけです。

この間、大人たちは所持品検査とかで、どこかに連れていかれました。姉と二人で心細いことです。間もなく両親とも帰ってきて安心しましたが、今度は寒くて眠れません。そのうち、アメリカ兵が巡察に來ました。

それも公式の巡察だったのかどうか。二、三人で銃は持たず、コンクリートの上に座り込んでいる日本人の間を歩きながら、トランクを開けさせたり、リュック

クサククの中を調べたりしました。どうやら、気に入ったものがあれば徵発していくようでした。私の近くに来ました。リュックサククを開けよという身振りです。小型の電熱器がありました。ニコニコして、もう自分のものにしたつもりです。しかし、母が大きな声で「ノー」と、断固として言いました。アメリカ兵も気が引けたでしょう。居直って威嚇するようなことはありませんでした。それでも何だったかは忘れませんが、とにかく何かを取り上げて去っていききました。

こんな時、父は英語を話しません。自信もないし、かえって辱めを受けるようなことがあつては困るのでしょう。でも、いざという時、頼りになるのは男より女ではないかというわたしの感想は、どうも戦後の生活を通じて変わらなかつたみたいですよ。断つておきますが、私は男です。

敗戦を実感

真夜中近くになっていたでしょう。また移動です。いよいよ今度は乗船ということらしく、それなりに元気が出ました。

船は興安丸でした。もともと関釜（下関―釜山）連絡船として活躍していた船だったのでしようか。私が「あの船だったのよ」と母に教えられて名前を知ったのは、その後数年してからだったと思います。シベリア地区に抑留されていた日本兵の引揚げ輸送にあつていた船の一つが興安丸でした。

乗船を待つて、長い長い列ができます。トボトボとノロノロと前進しているようですが、なかなか立ちあきません。やっと舷側まできました。乗船です。両側に銃剣を持ったアメリカ兵が立って督励します。

「イソゲー、イソゲー」と、それだけは覚えた日本語なのでしよう。まさか剣先でつかれることはありませんでしたが、雰囲気としてはかなり尖っていたような記憶があります。清州で顔見知りになっていたアメリカ兵とはまったく印象が違いました。子供なりに本当に「敗戦」を自覚したのは、この時だったと今も思っています。

乗船してからも、次々と出る指令が混乱するらしく、結局は雨覆いもない上甲板に追い上げられた感じにな

りました。でも船には乗ったし、これで日本に帰れるという安心感からでしょう、疲れも重なって、朝鮮での最後の一夜は船上で熟睡しました。

サヨーナラ、サヨーナラ

翌朝早く、興安丸は出港しました。だんだんと遠のいていく釜山の山並みを朝日が鮮やかに照らし出していました。周囲の大人たちから、「サヨーナラ、サヨーナラ」の声が自然に出ていました。さすがに両親には、万感胸に迫るものがあったろうと思います。

釜山はたちまち見えなくなりました。航海は順調だったのかどうか。なにしろ玄界灘のことです。船もそれなりに揺れたのでしょうが、家族は幸い船酔いに悩まされることもありませんでした。

玄界灘が荒れる時は、波しぶきが上甲板まで上がってくるとかで、毛布と新聞紙をひざ掛けにしていますが、そこまで荒れることがなかったのはラッキーでした。

両親は別として、姉と私は、こんなに大きな船に乗って、それも祖国に向かって玄界灘を渡るのですから、

ロマンチックですらありました。生まれ育った南鮮・木浦は港町ですから、海は知っていましたがそれだけのことで、こんな大海に出た経験はありません。

二人がはしゃぐのを両親も別にうるさがらず、かえって気が紛れるのか、「ほら、こうして本当の沖合に来ると、水平線が丸くなって見えるだろう。地球はやはり丸いんだ」などと解説をしていました。

一日の航海中、どちらかといえば曇天であったと記憶しています。でも海上に霧がかかることもなく、まさに一望千里。水平線が遠く湾曲しているのをこの目で見ました。

やがて入港先が発表されました。それまでは両親も、単純に下関あたりを想像していたようですが、実際には山口県の仙崎港ということでした。今では釜山一下関はフェリーが結んでいて時間もさしてかからないようですが、当時は機雷も投下されていたので、ただまっすぐ航行したらいいというのではなかったのでしょうか。

「おお、日本だ」という声が船内で上がったのは、もう夕刻になりかけていた時間でした。松の木の生え

た小島が目に入ります。その島を見て、「日本って小さいねえ」というのが、小学生である私の感想、第一印象でした。それを聞いて周りの大人たちが笑いました。

そこからがまた大変でした。仙崎は、にわか仕立ての引揚港だったらしく、大型船が横付けするような岸壁はありません。小さなはしけに小グループずつ分乗して上陸することになります。

我が家の番が回ってきたとき、日はすっかり暮れて、月もない海は真っ暗なだけでした。疲れてもおり、もう眠くてなりません。目をこすりながら両親にせかされ、せかされ、上甲板からどこまで降りたのでしょうか。とにかく船腹に大きな出口があったような記憶があります。そこからはしけに乗り移るのですが、船は互いにちぐはぐに揺れていますから、タイミングをみて船員さんが、「今だっ！」と手を引っ張ってくれます。「船端に手をかけてはいけない」と、これは厳しく注意されました。船が接触すると危険だからです。

無事上陸した後、手続きもあったのですが、そ

のへんは覚えていません。乾パンか何かをもらって、宿舎に向かいました。宿舎といっても、ホテルなどであるはずもなく、一般の民家でした。きっと町から割り当てがあったのでしょう。気持ち良く泊めてもらいました。子供心にも素朴な方々という印象で、敗戦の引揚者に同情してくれたのだと思います。風呂に入れてもらい、安心してよく眠りました。

ひとまず松江へ

翌朝、山陰線の満員列車に乗って島根県の松江に向かいました。復員の兵士たちも乗っていました。駅ごと何人かが下車していきます。「がんばれよ」と、車内から声の掛かる情景が繰り返されました。

松江をめざしたのには理由があります。我が家は母からして在韓二世ですから、内地に何の縁故もありません。父の両親も弟妹たちも、母の兄一家も、皆朝鮮に住んでいました。ただ、一縷の望みとして期待をしないだのは、父の末妹が松江に嫁いでいたことです。血縁のある先としては、ここしかありません。幸い父が、一度訪ねていたことがありました。なんとかここ

にたどり着けば、親戚たちの消息も分かるだろうというわけです。

私たち姉弟には昭和三年生まれの兄がいます、当時、熊本の陸軍幼年学校に行っていました。連絡が途絶えたままの、この兄がどうしているのかも両親にとっては大変な心配事だったろうと思います。

まだ引揚げを待っていたとき、「とにかく松江を頼っていけ」という手紙を兄宛に父が書いていましたが、それが着いたのかどうか。帰国後聞いたはずですが、覚えていません。その手紙の宛先として父が「日本国熊本市」と書いたことに異様な印象を持ったことを記憶しています。確かに私たちが生まれ育った朝鮮は、外国になってしまったのでした。

松江に着いたのは何時だったか。親戚が、皆そろってここに頼ってきていました。住んでいたのが木浦や馬山など海岸部でしたから、船を共同で雇ったりして、我が家よりかなり早く引き揚げることができましたのです。日ならずして兄も九州から合流してきました。一家眷属、一人も欠けることなく再会でき、とりあえず住む

家を提供してもらえたのですから、本当に有り難いことでした。

そうした配慮を受けられたのも、実は先に書いた父の妹の嫁ぎ先が、地元の大家だったからで、別棟で奉公人の住まいなどもあったほどです。ここのご当主が苦労人で、度量の大きな人でした。でも、いくらそれでも、叔母は次男の嫁でしたし、戦後の混乱という特別の事情があったにせよ、これだけの親戚を引き受けるにあたっては大変な気苦労があったに違いありません。今でも同情し、感謝しています。

戦後の生活

引揚げの苦労自体は、北朝鮮や満州（現在の中国東北）からの方たちに比べれば、物の数でなかったと思います。私たち一家の、本当に苦しい生活が始まったのはそれからでした。文字通りリュックサック一つ、身一つの引揚げでしたから。

ただ、これについてはあまり書く気がしません。第一、戦後の苦労は別に引揚げ者だけのことではありません。それに事実を書くとうると、今でも口が苦くな

るほど不愉快な記憶が多いからです。一つ、二つのエピソードを記録するにとどめたいと思います。

昭和二十年の暮れには、父の友人を頼って一家で大阪に出て行きました。もともと本籍が大阪でしたし、父は学校も大阪で出ています。でも生活は落ち着かず、私も一年の間に小学校を三つも変わる経験をしました。

その間のことですが、ある同級生から「お前らが引き揚げてくるから米が足りなくなったのじゃ」と言われたことがあります。有効な反論もできず、ただ日本人の心の狭さを感じました。次の学校で生徒自治会に出ていましたら、欧米の給食制度について解説していた先生が私を指さして、「ひもじそうな顔をしようななあ、給食がうらやましいか」と言いました。教室中が笑います。弁当の持参もままならず、事実うらやましいと思って聞いていただけに、心に傷を受けました。戦後の経済環境の激変に、謹直なだけの父は対応できず、また社会的価値観の逆転は、将校生徒だった兄を苦しめました。立場を変えての政治活動にも安住できなかつたのでしよう。

そんなわけで、我が家の生活は長らく、貧しく、荒れたものになりました。高校に入ってから、私は授業料滞納の常連で、いつも名前が掲示されたものです。まあ、そのころは、そんなことをする学校を軽蔑するくらいには生意気になっていましたけれど。

もっとも貧しさゆえに屈辱を受けたことはしばしばで、そんなとき、「僕は何も悪いことはしていないのに……」と呟きながら、道を涙して歩いたものです。ただ、今まで書いたことと矛盾しますが、そのころの私の支えになっていたのは、「朝鮮にいたらこんな目に遭うことはないはず。今の自分は仮の姿なのだ」という、裏返しの誇りでした。「朝鮮にいたら僕だって……」という「仮想現実」に、気弱な少年である私は逃避していたのでしよう。

私が非行に走らなかつたのは、生来そんな度胸のないのが第一の理由ですが、やはり母と姉の愛情のお陰だったとシミジミ思います。姉夫婦も今は第一線を退き孫の世話に多忙な毎日のようです。

振り返れば敗戦後、様々な人間関係の裏表を「およ

を見るべきほどのものは見つ」という経験をしてしまったのが、私の少年―青年時代でした。正直言って、日本も日本人も、あまり好きになれません。と言って朝鮮が自分の故郷だなどと、朝鮮の人に対して気が引けて言えません。同じ朝鮮育ちの作家・後藤藤明生の小説にあった「僕は、どこに帰ればいいのだろう」という一節に、今も同感します。日本育ちの友人たちには説明しにくい漂泊感です。

後年、それでも学校は出してもらい、自分なりの生活ができるようになって、結婚もしました。この連れ合いは生粋の浪速女で、昭和二十年三月の大阪大空襲で焼け出された組です。戦後しばらく、やはり辛苦辛苦の生活だったようです。「我ら夫婦に共通する価値観は、一種の虚無主義だなあ」と笑い合います。

世論調査などで結構回答数の多い「中流の上」などと思いませんが、さりとて格別に貧しいとも感じず、自分の生活のベースさえ守れるなら、それだけで十分に優雅です。マイホームもマイカーも不要。気ままな書物の購入と時折の探鳥旅行、それに時に試みる

いささか贅沢な外食。付け加えると、これだけは欠かせない少量の晩酌で満足しています。財テクなど無縁も無縁。そして一切の權威を信用しません。

敗戦時の小学四年生も、今や人生の残りいくばくもありません。「他人に頼らず、頼られもせず」、二人で仲良く頑張れるところまで頑張ればと願っています。

本当の戦争犠牲者は、戦死者であり、戦病死者であり、戦災死者であり、引揚げ途中斃死した人たちです。彼らの無念を思い、肅然とします。

咸興引揚げ体験

長崎県 酒井 種 寿

一 生い立ちから少年の日の船出

瀬戸内海から四国地方の段々畑を眺めた中国人が「耕して天に至る貧以て知るべし」と言ったとか。私の住んでいた村もそれに劣らぬ急傾斜地で、農家の耕